



「見たり、聞いたり、探ったり」No.296

通算 No.447

青木行雄

「福澤諭吉先生」と「青の洞門」No.2

大分県・中津市本耶馬溪町

福澤諭吉先生は日本の為に大変な功績をのこされ、故郷の中津にも大変影響が大きく、その一部を前号で紹介した。そして中津市本耶馬溪の「競秀峰」を福澤先生は買いとられ後世にのこされた。その場所がどんな所か、どんな経緯があって有名で「名勝地」なのかを記したい。

大正八年に発表された菊池寛原作、「恩讐の彼方に」の「青の洞門」は一躍有名になり、中津市の耶馬溪は全国に知られた。ほぼ実話でトンネルの穴や使われた「ノミ」「オノ」等も近くのお寺にのこされている。

この小説の、あらすじはこのような文面である。

菊池寛「恩讐の彼方に」の小説から。

『中川三郎兵衛(市九郎の主人)の切り込んできた太刀を受け損じて、左頬に微傷を受けてしまった。主人三郎兵衛の妾と非道な恋をした自分の致命的な罪を意識している市九郎は、主人の振り上げた太刀を必然の刑罰と考えたが、いったん自分の血を見ると、市九郎の心は、たちまち豹変、燭台を投げつけ主人が怯んでいるスキに脇差を抜いて、飛び掛かった。主人が十数回太刀を合わせた後、市九郎は、主人の脇腹を横に払って切った。相手が倒れると我に返った市九郎は、自分が主人殺しの大罪を犯したことに気が付いて、後悔と恐怖のために、そこにへたばってしまった。自らも死ぬ覚悟を固めたその時、お弓が次の間から出てきて、「有り金をさらって逃げよう」と言い出した。市九郎は女に引きずられるように、金目のありそうな衣類や印籠を奪って浅草田原町の三郎兵衛の家を出た。安永三年の秋の初めであった。』



中津市「青の洞門」山は「競秀峰」すばらしい景観である



「競秀峰」くぼみの所にくさりチェーンがあり昔人が通っていた



青の洞門、今は車も通れる道路であるが手掘りの穴のこっている



今も手掘りの穴の見学者がたえない(仲間)

市九郎とお弓は江戸から東海道を避けて、人目を忍びながら東山道を上方に向かった。お弓は、市九郎が沈んだ様子でいると、「どうせ凶状持ちになったからには、くよくよしても仕方がないじゃないか。度胸をすえて世の中を面白く暮らすのが上分別さ」とそそのかした。二人は窮するにつれ悪事を働くようになった。往来の町人や百姓の金を奪いながら旅を続け、市九郎もついには悪事の面白さを味わい始めた。彼は信濃から木曾へかかる鳥居峠に土着し、昼は茶店を開き、夜は強盗を働いた。

彼らが江戸を出てから三年目のことだった。信州の豪農らしい若い夫婦が市九郎の家に立寄った。夫婦は峠を登りきった疲れを店で休めたあと、鳥居峠を下りていった。市九郎は二人を追い、待ち伏せして殺してしまった。急に人を殺した恐怖を感じた市九郎は、二人の胴巻きと衣類を奪うと帰ってきた。お弓は女の髪飾りを取り忘れた市九郎を責め、取りに戻るようにせがんだが応じないため、自分で髪飾りを取りに行った。市九郎は、お弓の後姿を見ていると浅ましさに強い嫌気がさし、ついに、そこから逃げ出してしまった。

その翌日、市九郎は美濃国の大垣在にある浄願寺に駆け込んだ。彼は最初からこの寺を志したのではない。遁走の途中に、偶然この寺の前に出たとき、彼の惑乱した懺悔の心が、ふと宗教的な光明にすがってみたいと思ったのである。浄願寺の住職は、自分の罪を告白した市九郎が自首しようとするのを止めて、仏道に帰依し、人々を救うとともに自分を救え、と教化した。市九郎は得度して了海という法名を得て、ひたすら仏道修行に励んだ。そして彼は自分の道心が定まったことを自覚すると、諸人救済の大願を起こして諸国行脚の旅に出た。

市九郎は九州の豊前の国、山国川の溪谷を辿っているとき、馬子の無残な死骸を取り巻く数人の者たちに出会い、絶壁の鎖渡しという難所でしばしば多くの死者が出ていることを知らされ、早速そこに行ってみた。そしてそこで、自分の身命を捨ててこの難所を除こうと思いついた。自分の求めていたものがようやく見つかったと思ったのだ。市九郎は、里の人々に笑われながらも何年も掘り続けた。十八年目、岩壁の二分の一まで穴を掘ることができた。里人は、寝食を忘れて力を尽くし掘り続ける市九郎を尊敬するようになった。

一方、非業の横死を遂げた中川三郎兵衛は家臣に主人を殺され、家は取り潰しとなった。長男・實之助はただひたすら父の敵市九郎のありかを求めて諸国を遍歴していた。

實之助が江戸を立って九年目、彼は九州の中津で漸く市九郎らしき者の<sup>うわさ</sup>噂を聞くと、急いで樋田村の洞門に行き老僧となった市九郎と出会った。しかし、この老僧を見ていると親の敵に対して抱いていた憎しみがいつのまにか消え失せた。敵は、父を殺した罪を<sup>ざんげ</sup>懺悔して、心身を粉に砕いて半生を苦しめぬいている。このような老僧の命を取ることが何の復讐であるかと考えた。老僧を尊敬する群衆に取り囲まれ、その場では仇討ちを断念しなければならなかった。

ある夜、實之助は洞窟の中に入っていった。そこには、深夜、人が去り、草木が眠っている中で、ただ暗中に端座して経文を読みながら鉄槌を振るっている了海の姿が、實之助の心眼にありありと映った。洞窟を揺るがすその力強い鋭い槌の音と、悲壮な念仏の声とに、激しく胸を打たれた。すでに仏心を得て、人々のために身を削る苦しみを味わっている高德の僧に対し、<sup>あだうち</sup>闇討ちをはかっている自分が恥ずかしくなり、ともに槌を振るい始めた。第一の槌を下してから、21年目、實之助が了海と出会って1年6ヶ月を経た夜、了海があけた小さな穴からついに光明と山国川の姿が眼に飛び込んで来た』

こんな筋書の青の洞門、23年もの月日をかけ、人が安全に通れるようになった了海の苦勞に、全国的に知れ渡る耶馬溪・青の洞門の景観、どうしても自然のまま後世まで残したいと故郷を思う「福澤先生」の強い愛からではなかろうか、と思われる。

最後に「福澤論吉」先生の為になる言葉

1. 「賢人と愚人との別は、学ぶと学ばざるとによって出来るものなり」
2. 「読書は学問の術であり、学問は事業の術である」
3. 「学問は米をつきながらも出来るものなり」
4. 「活用なき学問は、無学に等しい」
5. 「一家は習慣の学校なり…」
6. 「学問の本趣意は、読書に非ず、精神の働きの在り」

※すばらしい先人に感謝しながら

※「ATM」の実行を考えながら毎日を

A - 明るく、T - 楽しく、M - 前向きに



今は整備出来ているがかなり大きな穴だった



この一部が掘ったといわれている穴である

令和6年11月4日記

参考資料

青の洞門マップ(中津市発行)、菊池寛の小説「恩讐の彼方に」より  
大分県中津市発行、不滅の福澤プロジェクトより